

2020年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	自閉症スペクトラム症のある子どもの自己理解を支える看護 —アセスメントツールの開発—
キーワード	①自閉スペクトラム症、②母親、③アセスメントツール

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏名	クサノ トモミ 草野 知美
配付時の所属先・職位等 (令和2年4月1日現在)	北海道科学大学 保健医療学部 看護学科 講師
現在の所属先・職位等 (令和4年7月1日現在)	北海道科学大学 保健医療学部 看護学科 准教授
プロフィール	精神科での勤務経験から、心身へのケアは、地域生活で早期から行うことが重要であると考えています。発達障がいのあるお子様の自己理解を中心に、ご家族も含めた看護について研究を進めています。今後は、実践的な研究を行うことを目指しています。

1. 研究の概要

本研究では、知的障がいのない自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder: 以下 ASD) のある子どもに母親が特性や診断名を伝える過程で必要な看護を検討する際に使用するアセスメントツールを作成し適切性を検討することを目的として行った。研究者は、母親が ASD のある子どもに特性や診断名を伝える体験からその過程 (特性・診断名告知過程) を明らかにしている。本研究では、特性・診断名告知過程の中でも母親の揺らぎに注目しながら過程をアセスメントするツールを作成し、妥当性の検証を行った。

2. 研究の動機、目的

近年、ASD のある子ども達が、抑うつ、適応障害などの精神症状を呈し、入院に至るケースが見られている。ASD の特性は、周囲からは理解されにくく、家族関係や学校における対人関係に課題を有している場合が多い。看護職は、子どもや親への支援に難しさを感じており、明確な看護指針を求めている。ASD のある子どもは、自己の特性を否定的に受け止め、受容できない状態が続くことにより自尊心が低下し、適応障害や引きこもりといった二次障害を引き起こす可能性が高い。深刻な二次障害を予防するために、子どもが肯定的に自己を理解する必要がある。そのためには、養育者である親が子どもの特性を理解し、子どもに特性や診断名を肯定的に伝える必要がある。看護職は、健診時や受診時に親と関わり、日常生活を支援する機会がある。

看護職は、母親が子どもに特性や診断名を伝える過程でどのような体験をしているのかを理解し、その過程を看護する必要がある。そこで、研究者は、ASD のある子どもへ母親が特性や診断名を伝える体験を研究し、すでに日本小児看護学会誌 (30 巻、P43-51) で報告した。この研究結果より、母親は子どもの診断を受けた時から【子どもの特性を受容することへの揺らぎ】を体験しており、看護職は、母親が特性・診断名告知過程のどの段階にあり、どのような体験をしているのか、母親の状況をアセスメントし支援する必要性が示唆された。そこで本研究では、特性・診断名告知過程で必要な母親への看護を検討する際に使用するアセスメントツールを作成することを目的とした。特性・診断名告知過程に沿ったアセスメントツールを作成する

ことにより、子どもに特性や診断名を伝える母親へ必要な看護の視点が明確化され、見通しを持って支援を提供することが可能になる。また、母親への支援は、子どもが自己理解できる環境を整えることに繋がると考える。

3. 研究の結果

看護職が特性・診断名告知過程で揺らぐ母親の状況を理解し、母親がどの段階にあるのか、母親の不安や困難への支援の必要性を認識・検討することを目的とした『アセスメントツール試案』を作成した。使用者は、ASDのある子どもの定期的な通院、入院などに対応する医療機関や地域の保健所、発達に関する施設で働く看護職とした。また、対象者は、医師にASDと診断（疑い）された小学生から高校生までの子どもの母親で、子どもに特性や診断名を伝えることに不安や困難を抱え揺らいでおり、支援ニーズのある母親とした。『アセスメントツール試案』は、特性・診断名を伝える過程の構成要素を基に、時間、アセスメントの視点、アセスメント項目、看護の視点から構成した。『アセスメントツール試案』の適切性の検討を行った結果、母親の状況を理解し支援するという視点と内容は適切であるという結果が得られた。しかし、アセスメントの使用法の明確化、アセスメント項目の抽象的な表現の変更、看護の追記修正などの必要性が指摘された。これらの結果を基に、『アセスメントツール案』を作成し、看護職へ適切性の検討を行った。その結果、母親の状況を理解し支援するという視点と内容は適切であるという結果が得られた。しかし、支援ニーズのある母親をどのように選定するのかという課題が残ったため、対象者は、母親、子ども、社会とのつながりに関する条件を設定し選定できるよう変更した。これらの結果を基に、『特性・診断名を伝える過程で揺らぐ母親を支えるアセスメントツール』が完成した。本研究で作成した『特性・診断名を伝える過程で揺らぐ母親を支えるアセスメントツール』の作成過程は、現在論文投稿中である。更に、ASDのある子どもの母親と関わっている看護職に、臨床の場で『特性・診断名を伝える過程で揺らぐ母親を支えるアセスメントツール』の使用を依頼し、有用性の検証を行い、現在検証を行っている。

4. 研究者としてのこれからの展望

今後は、『特性・診断名を伝える過程で揺らぐ母親を支えるアセスメントツール』の更なる精選及び実用化を目指し検討していきたい。また、母親自身が特性・診断名を伝える過程を知ることによって、子どもが特性や診断名を理解できるよう見通しをもって養育することが可能となり、母親が自分の状況を理解し、自ら支援を求めることが期待できる。今後もASDのある子どもたちの自己理解を支えられるよう実践的な研究を進めていきたい。

5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

本研究を実施するにあたり、貴重な奨励金の助成をいただきましたことに感謝いたします。今後も自閉スペクトラム症のあるお子様とご家族への看護に活用できる研究を行っていきたく考えています。